

Uma noite da Ibéria イベリアの夜 Una noche de Iberia

«Olé» 24 de julho/julio, 2010

Marie Mine (canto) – Masami Takaba (viola/guitarra)

うた：峰 万里恵 ギター：高場 将美

I

1. ポルトガルの家 *Uma casa portuguesa*

作詞：レイナルド・フェレイラ/ヴァシユコ・マトシュ・セケイラ Reinaldo Ferreira / Vasco Matos Sequeira

作曲：アルトゥーロ・ヴァシユ・ダ・フォンセーカ Artur Vaz da Fonseca

夭折した詩人レイナルド・フェレイラ（1922-59）はポルトガル人ですが、スペインのバルセローナで生まれ、アフリカのモザンビークで亡くなりました。この曲はかつてポルトガル領だったモザンビーク（1975年独立）の首都ロウレンソ・マルケス（現在の名はマプート）でつくられ、マトシュは詩人でアマチュア歌手（父親は高名な歴史学者）、ヴァシユは、ナイトクラブのバンドなどの編曲指揮者です。1951年にここに来たアマーリア・ロドリゲシュさんが気に入って、ポルトガルに帰っても歌ってくれたので有名になり、国際的な大ヒット曲になりました。

ポルトガルの家には、よく似合う、テーブルの上のパンとワイン。だれか扉を叩く人があれば、その人はみんなといっしょにすわる。

この率直さがよく似合う。ひとびとは心を偽らない。貧しいことの喜びは、人に与えて、それで満足するという豊かさにある。

貧しいけれど居心地のいいわたしの家には、おなかいっぱい愛情がある。

窓のカーテンに月光と太陽。素朴な喜びには、ほんのすこしのものでじゅうぶん。愛とパンとワイン、鍋で

湯気を立てている緑のスープ。

石灰の白壁、ローズマリーのほのかな香り、庭には金色のブドウひと房、バラが2輪。

青いタイルの聖ヨセフ様、春の太陽、キスの約束、わたしを待っている両腕。ここはポルトガルの家にかがいない！

*「緑のスープ Caldo verde」は、ポルトガル特産の、とても濃い緑色のケール（キャベツの仲間）の極細切りを熱湯に投げ入れると出来上がりです。調味料は塩とオリーブ油のみ。より上等なものは、ポテトでとろみをつけます。

2. ファド・タマンキーニャス *Fado das Tamanquinhas*

作詞：ジョアオン・リニャールシュ・バルボーザ João Linhares Barbosa

曲：カルロシユ・シモンエシユ・ネヴシユ Carlos Simões Neves

伝統的なファドの世界では、まず歌い手は歌詞を選んで、その後、それにふさわしい既成のメロディに乗せてうたいます。この曲は、アマーリアさんが詩人から歌詞をもらって（買ったのかもしれませんが）、ファド・アーティストたちが《タマンキーニャス》と呼んでいたメロディ（曲）に乗せました。作者の通称が曲名になったわけです。

さまざまなたと、さまざまのサウダードで、この美女リスボンには生きている。頭がおかしくなったようなことや、意地悪なこともする。でも、根は純粹で善良。いろいろな軽はずみなおこないはするけれど。

高級なシアード街ではブルジョワ女になる。彼女の中庭では、裁縫女。公園の料亭ではファドを歌い、市場では値切り屋の女。そしてタイジュ河が彼女のいいなづけ。

さまざまな歌を、通りを売り歩く呼び声にする。空と月が好き。聖体行列では信仰をもって歩む。街のマルシャ（祭りのダンス・パレード）では正気をなくして踊りまくる。彼女はたくさんの人に嫉妬して、たくさんの人に情熱を燃やす。



*「サウダード Saudade」は、思い出や郷愁といったニュアンスも含み、失ったものや、そこのないものを愛し、思い起こすときの、甘美な悲しみの感情です。

「シアード Chiado」地区（上写真）は、都心に隣接し、高級店や上流の人々のためのカフェが並んでいます。

末永い命を！ この美女リスボンに！ ほかの町々と違って生きて！ マドラゴア区は青い街。いろんな欠点と色々な長所、すべてをこのリスボンはもっている。

「マドラゴア Madragoa」地区（右写真）は、国会議事堂の下からタイジュ河にかけての下町です。とても愛されている地区ではありますが、他の地区より特別に有名なわけでもありません。詩の韻律の都合で、ここに代表として選ばれて特筆されたようです。



3. わたしは川で洗っていた〔洗濯〕 *Lavava no rio, lavava*

作詞：アマーリア・ロドリゲシュ *Amália Rodrigues* 作曲：ジョゼ・フォントシュ・ローシャ *José Fontes Rocha*
アマーリアさんが重い病気で、ほとんど寝たきりで再起の希望もなかった時期に、人に見せる気はなく書いた詩です。本人は「詩」とは呼ばず、ただの韻文としていますが、これを歌詞としてうたうことが、彼女に再び生きてゆくエネルギーを与えました。作曲者は永く彼女と共演したギターラ（ポルトガル・ギター）奏者です。

川で洗たく、わたしは川で洗っていた。凍る寒さにわたしは凍っていた。川へ洗いに行くときは、ひもじい思い。おなかをすかせていた。ときには涙、わたしは泣いた。お母さんの泣くのを見て。

ときには歌も、わたしはうたった。ときには夢も、わたしは夢見た。わたしの空想の中で、いろんなことを空想した。そして泣いていることも忘れた、くるしんでいることも忘れた。

もうわたしは川へ洗たくに行かない。でも泣くことはつづいている。もうむかし夢見たことは夢に見ない、もう川で洗たくをしないのだもの。それなのにどうして、この寒さがわたしを凍らせるのか、あのころわた

しが凍っていたよりも冷たく。

ああお母さん、わたしのお母さん、どうして懐かしいのでしょうか、あのころ不幸を知っていたということの幸せが、あのころわたしを苦しめたひもじさが、わたしを凍らせた寒さが、そしてわたしの空想が。

もうわたしたちは、おなかをすかせていない。でも、もうわたしたちは持っていない、何も持っていないがゆえの望みを。

もうわたしたちは夢を見ることを知らない。もう、だましながら進んでゆく、死にたい望みをだましながら。

4. あの通り *Aquela rua*

作詞：ジョアオン・リニャールシュ・バルボーザ *João Linhares Barbosa* 作曲：ジャイム・サントシュ *Jaime Santos*



✦ 詩人リニャールシュ・バルボーザと
ファドの女性歌手ベルタ・カルドーソ

作詞者は、最高の「ファドの詩人」とあらゆる人々に認められた、民衆文学の巨匠といえます。街角の即興歌手としてスタートし、1920年代から、ファド専門誌の編集・発行、プロのファド・アーティストの活動する専門のホール（後の「ファドの家」につながる）の設立運動などで、ファドを社会的に認知させるのに大きな貢献をしました。1930年ごろまで、ファドが聴けるのはレビューやヴァラエティ劇場の1シーン、あるいは料亭での貸し切りパーティ、あるいは町内の酒場だけでした。

リニャールシュ・バルボーザは、万里恵さんがいちばん好きな作詞家で、「彼の曲を全部うたいたい」とまで言っています！ この歌詞はアマーリアさんのために書いたようです（べつに彼女の実体験そのものではありませんが）。作曲者はアマーリアさんとも共演した、すばらしいギターラの名手で、この人も万里恵さんの特に大好きな音楽家です。

わたしに、その通りの話をしないで。あの通りは、わたしにとっては、いちばんきれいな通りだった、いまだに。

そう、あなたは黙っていてくれたほうがいい。わたしに、今日の時間のことを話すなんて！ 過ぎてしま

ったことでも、わたしに話さないで。

あの幻影の時代、わたしは、素朴な白百合のように小さかった。月の光のように純粋、わたしはきれいな女の子だった。その通りの始まりから終わりまで。

小さな四角の模様の、青い上っ張りを着て、学校へかよった。リボンと紐で飾って。

きょうわたしは、ほかの道をたどっている。わたしは、あなたの両腕の鳥かごに捕らえられてしまった。

わたしには楽しい歌たちがあった。はやりだったそんな歌だけしか、今のわたしはうたえない

——見てごらん 悲しいやもめさん

回って歩いてる 泣きながら歩いてる。

わたしは、あの噴水の妹だった。あの正面にあった噴水。わたしは、ベラベラおしゃべりを覚えた、噴水といっしょに。

でも、あとですべては変わった。なぜなら、ある日あなたが通り過ぎたから。あなたが通り、泉はかれてしまった。

わたしの小さな土の水つぼー変なおもしろい形のつぼーそうなることに決まっていたんでしょ、こわれてしまった。

あなたはわたしを、あなたのものと呼びながら通った。そのときから、もう、わたしは踏んでいない、あの通りの石たちを。

わたしにあの通りの話をしないで……

5. 黒いお下げ髪の流行 *Moda das tranças pretas*

作詞：ヴィセント・ダ・カマラ Vicente da Câmara

曲：リノ・ベルナルド・テイシェーイラ Lino Bernardo Teixeira

1920年代でしょうか、(たぶん)世界ちゅうで、断髪のモダン・ガール・ファッションが大流行し、それまで宝物のようにしていた長い髪を切ってしまった娘たちは、すぐに後悔の涙を流した——と、各国のポピュラー・ソングで、からかわれています(右のイラストは当時のメキシコの漫画です)。

この曲の作詞者は、貴族の家系出身の、粋な遊び心にあふれた男性ファド歌手で、ギターを弾きながらうたい人気者でした(80才を過ぎた今も、気が向いた時にはうたっているようです)。メロディをつくったのはファドの男性歌手(1895-1947)で、通称ジンギーニャスという、伝説的な存在のアーティストです。



彼女はきれいで、人を恋に誘う風情をもっていたから、《黒いお下げ髪の娘》というだけで、だれにでもわかった。シアード地区を、一日ちゅう歩きまわっていた、スマイルの花束を呼び売りしながら。

そして、通り過ぎる、流行の先端を行く女の子たちは、悲しくなってしまった、じぶんの髪のことを考えて。彼女に見られると恥ずかしくて、頭を隠した。そして、だんだん、みんな髪を伸ばすようになった。

何日も過ぎた。そしてシアードの娘たちは、スマイル

を飾ったお下げ髪にするようになった。男たちはみんな、その新しい髪形を喜んだ。こうして生まれた、黒いお下げ髪の流行が。

スマイル売りの女に、もう今日では、だれも会えると期待していない。彼女はサウダードを残して去っていった、ある夕方に。

いまシアードは、千のお下げ髪であふれている。でも、だれも彼女のような黒いお下げ髪はもっていない。

6. 悲しいギターラ *Guitarra triste*

作詞作曲：アルヴァロ・ドゥアルト・シモンエシウ Álvaro Duarte Simões

作者は1960年代なかばから曲を発表していますが、希望をうたっている、すべて宿命と人生をあきらめているようなところがあり、すこし人間不信のようでもあり、歌詞もメロディも、なんだか心に引っかかるファドを作る人です。

たとえどんなに強い人でも、望むものをすっかり手に入れることはできない、野心があっても。

必要なのは、その人の価値を形にして示す、ひとつの愛の約束。それがひとつの夢を育てる。

どんな人でも、自分の人生に願いを祈る、この世に生まれてきた者にふさわしい幸せを。でも人生は、だますすべを知っていて、人々は感じさせられてしまう。人生がわたしたちに与えなかった幸福まで。

ひとりの女性は、ひとつのギターラのような。どんな人でもいいわけではない、彼女を抱き、震えさせる人は、どのように手にするか、やりかたを知っている人は、彼女の魂をつかまえる。触れるすべを知っている両手で。

そんなわけで、心は簡単にだまされてしまう、しあわせを願っていると。

悲しいギターラ、彼女は信頼できる人を探し求めている。彼女の涙が語っているものを 感じていない人の両手に抱かれて。

7. ヴィウヴィーニヤ (やもめさん)

Viuvinha

ポルトガル伝承曲 編：アラン・ウルマン Alain Oulman

編曲者はリスボン近郊生まれのフランス人で、アマーリアさんがうたうための新しいファドをたくさん作曲したことで有名です。この曲は、ポルトガルの良く知られたわらべうた(?)を、編み直したものです。

あそこを、やもめさんがやって来る。泣きながらやって来る。それでいい。彼女には見つからないだろう、結婚する人が。

わたしはやもめ。あちらの側からやってきました。わたしは結婚したい。誰とするのか見つからない。あなたとなんかじゃない、あなたとなんかじゃない。あなたは、わたしのすてきな人だけれど。

やもめ、悲しいやもめ。悲しそうで、かわいそう。世界をさすらう男に出会ったおかげで、ひとりぼっち、

見捨てられて生きている。

やもめさんを、あわれみましょう。彼女にはまだ値打ちがある。今までやってきた人は、彼女の夫でさえも、彼女の胸に愛を残さなかった。

わたしはやもめ。あちらの側からやってきました。わたしは結婚したい、誰とするのか見つからない。あなたとなんかじゃない、あなたとなんかじゃない……ただあなたとだけ、わたしのすてきな人あなた。

II

1. セラーナ *Serranas*

19世紀フラメンコ伝承 編：チョコレート/ペペ・エル・デ・ラ・マトローナ/マノーロ・カラコール
Chocolate / Pepe el de la Matrona / Manolo Caracol

19世紀前半に、どこかの民謡をフラメンコ的にうたった1曲として流行したと伝えられています(文献資料はありません)。同世紀後半になって、すばらしい声量で伝説となっているシルベリオ(父親はイタリア人だが、ヒターノ社会に生まれ育つ)が独自の創造をし、得意の曲(いろいろな歌詞で)にしていました。セラーナということばは「山脈の女」あるいは「山脈の調べ」といったニュアンスです。フラメンコで山脈(シエーラ)というと、ロンダの山脈がすぐ連想されますが……。きょう中間にうたわれる、マトローナのスタイルは、シルベリオから直接に学んだものです。シルベリオは「《あけぼの》は、泣きながら山脈から下りてきた」とうたっていたらと思うれます。

なお、ギターは《シギリージャ》というフラメンコ独自の5拍子のリズムを借用して弾きますが、歌のメロディは、流れ(旋法)の上でもリズム的にもシギリージャとは本来は無関係で、むしろ《ファンダンゴ》という形式に近似しています。ただし、ギター・ソロのときは、つねにシギリージャのリズムを守って演奏されます。ギター・ソロのセラーナは、ニーニョ・リカルドという演奏家が創始者だといっているでしょう。

あちら、山脈の高いところで、雪が降っている……雪が降っている、そして羊飼いの女たちは取り残されている、羊の群れといっしょに。

そして羊飼いの男たちは、給金の取り決めをしている、旦那たちと。

ああ、なんと胸が痛む、かわいそうに！ 羊飼いたちは眠れない、まともなベッドでは。

《あけぼの》は生まれるとき、泣きながら生まれてくる……泣きながら出てくる。かわいそうに、どんな夜を、すごしていたのだろうか？ なぜか、《あけぼの》は、昼間はたのしく遊び、夜は泣いている。

めすの子羊1頭……めすの子羊。あんまりやさしくいたわっていたら、野獣になってしまった！

2. ラ・タラーラ *La Tarara*

カスティージャ地方ソリア伝承曲 編：フェデリーコ・ガルシーア・ロルカ Federico García Lorca

タラーラは頭がおかしい女性のことで、この民謡はスペイン全国で有名になり(歌詞はいろいろあります)、カタルーニャやバレンシア地方では、子どもたちのクリスマスの歌としてポピュラーです。詩人ロルカは、1932年に移動劇場をひきいてソリア周辺の各地で公演をしました。そのときに採集してピアノ伴奏の歌曲に編んだのでしょう。緑の野で踊りくる女性……ロルカごのみの風景ですね。カスティージャ地方で生まれた歌とはいえ、クラシック作曲家アルベニスが『セビージャの聖体祭』にメロディを借用しています。アンダルシーアでも愛されてきた歌なのでしょう。

アイ、タラーラ、頭がおかしくなって、腰を動かす。
オリーブの実をつむ若者たちのために。

わたしのタラーラは着ている、みどりのドレス。飾りひだがいっぱい、鈴がいっぱい。

わたしのタラーラは着飾っている。絹色の、すその長いドレス、レターマとミントのあいだで。

アイ、タラーラ、シー。アイ、タラーラ、ノー。アイ、タラーラ、わたしの心の女の子。

*レターマ=日本語エニシダ。マメ科の黄色い花の観葉植物とのことだが、アンダルシア地方などでは野生で茂みになっているらしい。みずみずしい緑色の、素朴な田園のシンボル。フラメンコの歌詞では、非常ににがい味のたとえで出てくる。胃の薬になる。

3. カフェ・デ・チニータス *El Café de Chinitas*

19世紀伝承曲 編：フェデリコ・ガルシア・ロルカ *Federico García Lorca*

題名のカフェ・カンタンテ（今日のフラメンコ・ライヴハウスの遠い前身）は19世紀なかばに、マラガに開店しました（同名のタブラオが現在マドリッドにあり、10年くらい前に東京でも六本木に支店を出していましたが、昔のカフェとはまったく無関係です）。曲中に出てくる闘牛士も実在人物です。曲の形式は《ペテネーラ》と名付けられますが、今日のフラメンコのスタイルとは、かなり異なったもの—これが原型なのでしょうか。

カフェ・デ・チニータスで、パキーロが弟に言った。
「おれはおまえより勇気があり、もっと闘牛士で、もっとヒターノ」

パキーロは時計を取り出し、このように言った。「あの牛は死ぬことになっている。4時半より前に」

街で4時の鐘が鳴ったとき、ふたりはカフェを出た。街に出ればパキーロは、さすが看板闘牛士であった。



カフェ・カンタンテ

4. ペナ・ペニータ・ペナ *Pena, penita, pena*

作詞：ラファエル・デ・レオン／アントーニオ・キンテーロ *Rafael de León / Antonio Quintero*

作曲：マヌエル・キローガ *Manuel Quiroga*

コブラ（スペイン歌謡）の最高の作者たち（全員セビージャ出身）が、フラメンコが生んだ最高のディーヴァともいうべきローラ・フローレス（ヘレス出身ヒターノ）のためにつくりました。歌詞に論理が欠如していて、ときには意味不明の情熱的なことばを羅列するのがスペイン歌謡の魔術です。1951年のメキシコ映画（曲と同名のタイトル）で、ローラがナイトクラブでこの曲をうたい踊るシーンは、今日見ても圧巻です。



●ローラ・フローレス像
（ヘレス市サンミゲル地区）
foto©Marie Mine

もしも大空を支配する力をわたしがもっていたら、まるで井戸のように黒いこの夜、お月様のナイフで、わたしはあなたの牢獄の鉄格子を切るだろうに。

もしわたしが日の光の女王、風と海の女王だったとしても、わたしは奴隷女となって綱に縛られよう、あなたの自由と引き換えなら。

わたしは花はいらない、お金も名誉もいらない。わたしを泣くがままにしておいてほしい、あなたのくるしみを泣くがままに。そしてあなたのそばにいたい、魂の愛する人、あなたの孤独の涙を飲み干しながら。

わたしは両目が痛い、見えないあなたを見ようとして。わたしは自分を捨てる！あなたの不運のものは、わたしのもっている4月のバラ。

アイ、悩み、悩み、わたしの心の悩み。それはわたしの血管を流れる、サイクロンの力をもって。

悩みはまるで雲に閉ざされた空、霧と石つぶてでいっぱい雲。それは、くつわをはずした子馬、どこへ行くのか判らない。

それは砂の荒れ野。悩み、それは牢屋の中でわたしを幸せにする天国。ああ、この牢屋のなかで。ああ、悩み。

5. このおかしな人生 *Estranha forma de vida*

作詞：アマーリア・ロドリゲシュ *Amália Rodrigues* 作曲：アルフレード・マルスナイロ *Alfredo Marceneiro*

アマーリアさんの、若いころの作詞です。メロディは、尊敬する先輩男性ファド歌手マルスナイロの『ファド・パイラード』という曲のものを借用しました。マルスナイロは、ファドのひとつの語りかたを確立したクリエイターで、男性ファドの最高のシンボル——彼のような存在はもう出てこないでしょう。

神様の意思だった——わたしが、このように思いまどいながら生きているのは。そして、すべての「アイ！」はわたしのもの、わたしのサウダードも。——神様の意思だった。

なんという変わった生きかたを、このわたしの心はもっているのだろう。なくしてしまった命で生きている、だれか運命を変える魔法の杖をあげればいいのに——なんという変わった生きかた！

ひとり立ちしている心、わたしの命令をかかない心。おまえは人々のなかで道をなくして生きている、かたくなに、血を流しながら——ひとり立ちしている心。

わたしはこれ以上おまえについていかない。生まれ、鼓動をやめなさい。どこへ行くのか知らないくせに、なぜ走りつづけることに、こだわるのだ？——わたしはもう、おまえといっしょには行かない。



●マルスナイロとアマーリアさん

6. ラグリマ (涙) *Lágrima*

作詞：アマーリア・ロドリゲシュ *Amália Rodrigues* 作曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ *Carlos Gonçalves*

1983年に発売された、全曲アマーリアさんの歌詞による2枚めのアルバムのタイトル曲でした。作曲者は、アマーリアさんが亡くなるまで共演したポルトガル・ギター奏者です。

悩みでいっぱいになって、わたしは横たわる。そして、もっとふえた悩みとともに起き上がる。わたしの胸に、もう居ついてしまったこんなやりかた、あなたがこれほど好きだというこんなやりかた。

絶望——わたしの絶望ゆえに、わたしの中で、わたしは刑罰を受けている。あなたがきらい——わたしは、あなたがきらいと言っている。そして夜は、あなたのことを夢を見る。

いつの日かわたしは、死んでゆくのだということを思うとき、あなたに会えないゆえの絶望のうちに、わたしは地面にショールを広げる。そしてそのまま、まどろんでいこう。

もしもわたしにわかったら——死ぬことによってあなたが、わたしのことを泣いてくれるとわかったら、ひとしずくの涙——あなたのひとしずくの涙ゆえに、どんなにうれしく、わたしは命を捨てるだろう。

ごいっしょに時間をすごしていただき
ありがとうございました。

またお会いするのを
楽しみにしております。
今後どうぞよろしく。

選曲・構成：峰 万里恵
プログラム作成：高場 将美

◆ホームページ：

<http://mariemine.web.fc2.com/>

◆メール：marie-mine@hotmail.co.jp

8月20日(金)19:00～(開場18時30分)

(1)『中南米音楽』の時代 (約45分)

*ラテンアメリカ音楽を、雑誌出版と、たくさんの来日公演のプロモートで、日本に普及した『中南米音楽』の中西環江さんに、今だから話せる裏話などを、くつろいで語っていただきます。聞き手は、1960年代から長くいっしょに仕事していた高場将美です。

(2)港町の酒場のうた (約60分)

*ブエノスアイレスのタンゴと、リスボンのファド——峰 万里恵(うた) = 高場 将美(ギター/MC)でおとどけます。

N.N. Estudio Ebisu

渋谷区恵比寿 1-21-6 TEL & FAX: 03-3444-3332

チャージ1800円(ワンドリンク付き)